

2020年4月27日

2019年度 総合文化研究所研究助成報告書

研究の種類 ※該当する()に ○を付ける	・共同研究 () ・個人研究 (○)	
研究代表者 (所属・職・氏名)	文芸学部・准教授・浦野 郁	
研究課題名	現代イギリスにおけるチャリティー、ボランティア精神に関する研究	
研究分担者氏名	所属・職	役割分担
研究期間	2019年4月1日 ～ 2020年3月31日	

研究実績の概要(1)	
<p>本研究は、大きく分けて(A)イギリスで行われているチャリティー、ボランティア活動の現地調査、(B)その社会的・文化的背景を探るための文献調査、の二つを軸に展開することを計画していた。それぞれについての具体的な研究実績の概要は下記の通りである。</p> <p>(A) イギリスで行われているチャリティー、ボランティア活動の現地調査</p> <p>2019年8月23日～8月31日に、イギリスのダラム(Durham)市で現地調査を行った。申請時に最も関心を持っていたダラム大聖堂レゴプロジェクトについては、完成したレゴブロック製のダラム大聖堂および、寄付金によってオープンした新しい展示スペース Open Treasury を実際に見学し、写真も多数撮影することが出来た。また、ボランティアとして活動に参加していた男女二名にインタビューすることが出来、参加への個人的動機や活動の詳細、なぜイギリスではチャリティーが盛んだと考えるかなど、約二時間に渡って詳細に話を聞くことが出来た。彼らの協力を得て、活動を報じる地元の新聞の切り抜きや、活動を振り返る限定版の書籍も入手することが出来た。</p> <p>また、かねてより親交のあるプリーストマン夫妻と数回面会し、夫であるデレック氏からは2018年度にビショップ・オークランドロータリークラブが行った慈善活動の内容と収支の概算、反省点について聞くことが出来た。妻のオルガ氏は体調不良のため長時間話すことが難しい状態だったが、現地調査終了後にこれまで携わってきた慈善活動についてまとめた文書をメールで受け取ることができた。イギリス国内の全ての慈善事業を管理する「チャリティ・コミッション(Charity Commission)」の存在や、NSPCC(National Society for the Prevention of Cruelty to Children)という社会的影響力の大きい団</p>	

研究実績の概要（2）

体についてここで初めて知ることが出来た。オルガ氏がこれまでに関わってきた慈善活動について、個人的なエピソードと共に生き生きと振り返る文書であり、一個人がどのようにチャリティーと関わってきたかを考える上で貴重な資料であると考え。

滞在中には現地の人々との会話から上記二つ以外の興味深い慈善活動についても新たに知ることが出来、非常に有意義な滞在であった。

（B）チャリティーの社会的・文化的背景を探るための文献調査

イギリスでは人々が頻繁に、ごく自然に、遊び心を持ってチャリティー活動を行っている。その背景にあるものは何か、という問いに対して筆者が想定していたのは、①キリスト教的な博愛精神、②階級制度を背景とした「ノブレス・オブリージュ」の精神、の二つであった。だが文献調査を進めるうちに、この予想は的外れであったとは言えないものの、全てを説明しうるものではないことが明らかになってきた。以下にいくつかのポイントを記す。

・キリスト教との関わりについて

イギリスのチャリティーは1601年の関連法制定以来、約400年の歴史を持つ。中世・近世においては教会・修道院を中心に行われてきた救貧などの慈善活動は、近代に入り教会の弱体化と中央集権化が進む中で、徐々に民間の手によってなされるようになる。ここから、チャリティーには元々、信仰の場から離れて一般の民衆に何が出来るか、という視点があったことが分かる。イギリスは他のヨーロッパ諸国に比べとりわけ信仰に篤い国ではなく、チャリティーの隆盛は信仰心だけでは説明できないと明言する文献も存在した。

・階級制度との関わりについて

チャリティーの背景に階級制度があることは間違いなく、王侯貴族のチャリティー参加には現在に至る長い歴史がある。階級的に上の者が下の者を気にかけることには社会格差への不満を懐柔し、社会階層秩序の維持という役割も期待されていた。しかし、特に19世紀の中産階級層に目を向けるならば、チャリティーには「社交」の要素が大きく、女性にとっては唯一の「公的生活」の場である（後に女性参政権獲得運動に繋がる）など、「ノブレス・オブリージュ」という言葉だけでは説明しきれない、個人の願望充足的な面があったことも見過ごせない。この点は階級制度の存在感が薄れた現在についても当てはまると感じる。

これ以外にも、チャリティーには反カトリック精神と結びついて他国との差異化に寄与してきた面や、福祉国家への転換との関わり（民間が独立性を保って行ってきた領域にどこまで国家が立ち入るべきか、という問題）など、イギリス人のアイデンティティ形成の根幹に関わるような数々の問いが関係してくることが明らかになった。また、筆者の元々の専門分野である文学研究の場においても、文学作品における慈善行為の描かれ方を考察する研究書が多数存在することが分かった。イギリスにおけるチャリティーという事象は当初の予想を遥かに上回る複雑さと広がりを持つものであることが分かったが、それを十分踏まえた上で、現代イギリスを生きる個人が具体的にどのようにチャリティーに従事しているか、そこにある想いとは何かに焦点を当て、学術論文だけでなく一般に向けて成果をまとめ、分かりやすく発信していく手立てを考えている。